

かつて人は、大自然に抱かれ、そこから食料などの恵みを得て暮らしていました。しかし、人の数が増え、自然の利用が加速すると、動物たちの一部にもいつの頃からか人の手が加わりました。人の作業を手伝う家畜が誕生し、そして、人とコミュニケーションを取り、人が愛情を注ぐ対象としてのペットが誕生しました。

今、人とペットを取り巻く環境や社会は大きな変化の中にあります。人とペットのよりよい未来に向け、そして互いの関係をより良いものにするために、今の私たちに何が必要でしょうか。「私たちがつくるペットとのこれから」。皆さんと今を見つめ直し、明るい未来を考える機会にしたいと思います。

ペットを飼うということ

ペットを飼ったその時から、飼い主にはさまざまな責任が生じます。習性や飼育などに関する正しい知識を学び、きちんとした飼育環境を用意して、毎日の食事や運動もしっかり管理しなければいけません。また、日々コミュニケーションを取り、ストレスや体調をチェックし、病気になれば治療を受けさせる責任もあります。「ペットを飼う」=「命を預かる」こと。その最期の時まで、責任をもって飼育することが求められるのです。

▶くわしくはパンフレット「飼う前も、飼ってからも考えよう」⇒



しつけとマナー

ペットは家族の一員であるだけでなく、社会の一員として暮らす存在でもあります。つまり、ペットにはトレーニングや社会化が必要です。

屋外では、排せつ物の放置や、放し飼い、吠えたり飛びつくなどの困った行動はペットが嫌われてしまう大きな原因になります。室内飼育の場合でも、吠え声・鳴き声やその他の物音、臭いなどで気づかない間にご近所へ迷惑をかけてしまっているかもしれません。犬は吠え癖や噛み癖がつかないように、普段からしっかりとしつけや訓練をすることが必要です。方法がよく分からない場合や、困ったことがある時は、しつけトレーナーや訓練士へ相談することもできます。飼い主の責任として、必ず徹底するようにして下さい。

ひと昔前であれば犬は庭先で犬小屋に、猫は屋外にお出かけ自由、といった飼い方の家庭も多くみられました。しかし、感染症や熱中症、不慮の交通事故、屋外で繁殖してしまうといったリスク、さらにご近所に迷惑をかけるといったことを考えると、目の届かない屋外での飼育はお勧めできません。特に猫は必ず室内飼育をして下さい。

世の中では、誰もがペット好きとは限りません。マナーを守り、周りの方にも配慮をしてこそそのペットとの共生社会です。

▶くわしくはパンフレット「無責任飼い主0宣言」⇒



ペットの迎え方

4ページへ

私たちが つくる ペットとの 新しい社会



人と動物の 共通感染症

6ページへ



動物の活躍の場

近年、犬や猫、そのほか様々な動物たちが、ペットとしてだけでなく社会の中で活躍する場を広げています。警察犬や災害救助犬、また盲導犬や聴導犬、介助犬といった障がいをもつ人を助ける補助犬としての活躍や、病院や学校での動物介在活動や動物介在療法などの現場では人を精神面からサポートしてくれることで注目されています。

人と動物がお互いにとっての良きパートナー、サポーターとして未来を作っていくための様々なヒントを、これらの事例が教えてくれています。

見守る社会

8ページへ



いざという時の備え

災害が起きた時、ペットを守れるのは飼い主だけです。まずはペットと人の両方の安全を確保し、避難するときはペットと一緒に同行避難することが基本です。そのためには、住まいの防災対策、家族との話し合い、避難場所や避難ルートの情報収集など、普段から災害発生に備えておくことが必要です。

また、飼い主の突然の病気、事故など、思いもよらない事情でペットの世話ができなくなったり、飼い続けることが難しくなったりすることも、人生には起こりえます。そんな事態に備えて、一時的にペットの世話をしてくれる人や、万一の時にペットを引き受けてくれる人を探しておくことも必要です。

いざという時に、ペットが他人に攻撃的であったり、むやみに吠えたり、他人の手を怖がるような状態では、世話をすることも、引き受けることもできません。普段から、家族以外の人に触られても平気なように他人に馴れさせておくことや、ケージやクレートでおとなしくしていただけるようトレーニングをしておきましょう。また、室内飼いの場合でも、マイクロチップ、迷子札の装着と情報登録・更新を忘れずにおきましょう。

▶くわしくはパンフレット「備えよう！いつもいっしょにいたいから」⇒
「ペットも守ろう！防災対策」⇒



繁殖制限

繁殖を望まない場合や、生まれた子の全ての面倒がみられない場合は、不妊去勢手術をするなど、ペットの種類に合わせた繁殖制限を必ずしましょう。

とくに猫の繁殖スピードは想像以上に速く、繁殖制限をしないと、あっという間に増えてしまいかねません。(オスメス1頭ずつの猫が1年後には約20頭に！)

近年、自分で管理できる数以上にペットを繁殖させてしまったり抱えてしまう、いわゆる多頭飼育問題が社会的な関心を集めています。人とペットが共生していくためには、ペットの繁殖を制限することは人間の責任です。

▶くわしくはパンフレット「捨てず増やさず飼うなら一生」⇒
「ふやさないのも愛」⇒

